

審査の経緯	
2015年 4月9日	第2回国文学専攻会議 所定の書類の提出が確認・検討される。 [所定の書類] 1. 学位審査請求論文の題目と目次案 1部 2. 博士論文に組み込む既発表論文の抜刷もしくはコピー 各1部 3. アピール文 1部
4月16日	第3回国文学専攻会議 博士学位請求論文を執筆できると判断。 予備論文審査委員会を設置し、主査と副査を決定する。 [予備論文審査委員会] 主査：佐藤 悟 副査：棚田輝嘉 副査：河野龍也
5月31日	申請者より博士学位請求論文題目が提出される。
6月30日	申請者より博士学位請求論文予備論文案が提出される。 以降、予備論文提出に向けて主査・副査と申請者が議論を重ねる。
9月30日	申請者より博士学位請求論文予備論文が提出される。
10月25日	博士学位請求論文予備論文公開審査発表会
12月17日	第20回国文学専攻会議 予備論文の合格を決定。 以降、博士学位申請論文提出に向けて主査・副査と申請者とが議論を重ねる。
1月30日	申請者より、実践女子大学学位規則第5条2項に基づき、学位請求論文の論文審査の請求がある。
2月6日	第9回文学研究科委員会 博士学位授与の申請取扱内規第3条1項に基づく学長からの諮問を受け、当該申請の受理を決定。同内規第4条と第5条に基づく学長からの付託により、審査委員会の設置を決定。 [学位論文審査委員会] 主査：佐藤 悟 副査：棚田輝嘉 副査：河野龍也
2月20日	博士学位請求論文公開口頭試験
2月22日	第26回国文学専攻会議 審査委員会より学位請求論文を合格とする案が提出、承認される。
3月5日	第12回文学研究科委員会 博士論文審査結果報告及び判定。

## 論文要旨

### 吉原と江戸文化に関する研究 - 妓楼和泉屋平左衛門を例として -

吉原と江戸文化について、妓楼和泉屋平左衛門を例に行った研究である。

まえがきでは、本論文の意義と構成について紹介する。江戸文化をシステムとして捉え、さらに、文化以外からの視点からも研究を進める。歴史認識における物理量としての時間軸の意義について論ずる。従来の吉原研究は、主として好事家により、二次資料、三次資料あるいは文芸資料や芸能資料に基づいて行われ、偏った側面から吉原が論じられてきた。本研究では、(一)過去帳などの内部資料に基づき、(二)尾張知多で発見の新出のゼロ次資料等を用い、(三)貸借対照表の概念を初めて持ち込み、妓楼の経営にメスを入れ、(四)ビッグデータの一つである遊女の紋を情報学の属性情報として扱い、(五)これまでになかった視点と手法から、吉原の実態を解明することを試みる。

#### 第一部 吉原の始まりと尾張出身者

第一章「知多半島で発見の吉原研究に関するゼロ次資料」では、これまで、知られていなかった、江戸吉原における尾張出身者の存在について述べる。昭和12年(1937)に愛知県半田在住の澤田次夫が、私家版の研究報告においてこれを紹介している。愛知県南知多町にある光明寺を現地調査し、元禄に遡る寺の過去帳、祠堂金記録、仏画、絵馬などのゼロ次史料の存在を確認した。岩屋寺では、吉原関係者が奉納した香炉の存在を確認した。これらを、吉原細見や遊女絵などと照合した結果、江戸前期から、揚屋、妓楼および茶屋のビジネスに、尾張出身者が多く参入していたことを明らかにする。

#### 第二部 和泉屋平左衛門と吉原の経営戦略

第二章「妓楼「和泉屋平左衛門」」では、武蔵足立郡淵江領出身の三代にわたる妓楼経営者和泉屋平左衛門を紹介する。江戸後期の文化三年(1806)から明治五年(1872)まで、規模の大きな妓楼を経営していた。和泉屋平左衛門は、経営不振に陥っていた二軒の妓楼、すなわち、京町二丁目「和泉屋壽美」および江戸町一丁目「太田屋善右衛門」を経営統合し、楼主としてビジネスを継承したと考えられる。妓楼、揚屋、茶屋の三者の経営を、貸借対照表の概念を用いて考察すると、会計处理的には遊女を固定資産として抱えることになる妓楼がもっとも資本を要することを明らかにする。

第三章「遊女絵の開板年と開板動機に関する考察 - 契情道中双ろく見立吉原五十三封を例として」では、浮世絵のジャンルの一つである遊女絵の開板時期を決定する手段として、吉原細見における遊女のデータと、遊女絵に描き込まれた紋に注目することを提案する。この揃い物は、文政七年(1824)の火災後の吉原の外での仮宅営業を終えて、翌年に吉原に戻ってきたことを宣伝するために制作されたと判明した。絵の構図が同一であっても、妓楼と遊女の名前を変えた14枚の異板が存在する。初板・後板の関係を、(一)吉原細見の記載事項と(二)遊女の着物に描き込まれた紋に着目し、さらに、(三)オランダ・ライデンの国立民族学博物館所蔵品のように購入時期が明らかという事実、また、開板後早

い時期にコレクションが成立した国会図書館での収蔵状況をもとに決定した。

**第四章「メタデータとしての紋に見る妓楼の経営戦略」**では、遊女絵に描き込まれた紋について、メタデータとしての視点から考察する。同じ名前の花魁が長期に同一の妓楼に存在することがある。京町一丁目にあった海老屋に、寛政12年(1800)から天保12年(1841)の40年間にわたって在楼した七人の鴨緑の紋について検討する。描き込まれた紋から、桐紋の鴨緑、いかづち紋の鴨緑、違い鷹の羽の鴨緑、抱茗荷の鴨緑、木瓜紋の鴨緑、桐紋の鴨緑のように個人を区別できる。一方、姿海老屋の場合には、襲名しても同じ紋が使われる。かつ、文政の七里の場合には、姉女郎が面倒を見るグループでは、全員が同じ桔梗紋を用い、「七」の文字が名前に共通であり、グループとしてのアイデンティティが強調されている。

**第五章「安政大地震と仮宅」**では、安政2年(1855)の江戸直下型大地震が、吉原に及ぼした影響について述べる。被害の状況は『冥途細見』や「浄閑寺過去帳」から読み取れる。地震と火災の後に仮宅営業について紹介する。とくに、和泉屋清蔵の妹の「和泉屋まつ」が仮宅の時だけ営業していたことを紹介する。震災の後の混乱期に様々な出版物が検閲なしで刊行されていたこと述べる。

### 第三部 吉原の文化

**第六章「吉原男芸者と芸能吉原男芸者と芸能 河東節山彦新次郎から見た歌舞伎、吉原俄、天下祭りにおける相互の関わり」**では、江戸の声曲が、吉原、歌舞伎、祭礼において共通であることを述べる。さらに、狂歌、浮世絵、出版、信仰などとも深く関係する。江戸の文化を研究するにあたり、相互に隣接する類縁文化同士の関わりを調べ、かつ、全体を俯瞰することが、その本質を理解する上で重要である。祭礼、歌舞伎の曾我祭、吉原俄を比べると、いずれもの場合、神慮を清しめる目的、出し物の中心としての声曲、そして、これを、吉原を本拠地とする男芸者が担当したという点において共通している。歌舞伎と吉原俄で三味線を弾いていた、吉原男芸者の例として酒井抱一と近かった、河東節の山彦新次郎および文次郎父子について紹介する。

**第七章「酒井抱一と吉原の文化」**では、吉原の文化的側面について述べる。明和から天明、寛政の知的な遊びの空間としての吉原の文的ルーツの一つとして、明末の南京の秦淮の花街を紹介した板橋雑記(はんきょうざつき)』を挙げることができる。煌びやかな才子佳人が織りなす南京の花街のイメージが、吉原に影響を与えた。その吉原版とも言うべき存在が、天明から文化文政期の吉原を拠点に、文化的活動に従事した酒井抱一である。抱一は、狂歌、俳諧、歌舞伎、声曲、浮世絵、神田明神や山王権現の祭礼など、江戸のあらゆる文化と関わっている。大文字屋の香川を落籍し、文化6年(1809)より根岸に住み、以後、琳派の後継者として絵画作成にいそしんだ。

「あとがき」では、本研究の特徴をまとめた。

## 審査要旨

第一章「知多半島で発見の吉原研究に関するゼロ次資料」は澤田次夫の『揚屋清十郎と尾州須佐村』に基づき、愛知県知多地方の光明寺・岩屋寺その他の寺院の過去帳、仏具等の調査に基づき、吉原関係者の記録を博捜し、知多半島と吉原の結びつきを明らかにした画期的な業績である。妓楼 海老屋理左衛門一族の消長や吉原で見番制度を創始した大黒屋庄六の過去帳を発見などは大いに評価すべき点である。ただし、各寺院の寺格、宗派、開基等と妓楼、揚屋、茶屋、吉原の町人等の宗派の問題については手つかずのままであり、特に岩屋寺の果たした役割を考察することが論旨の上では極めて重要であるが、本論では岩屋寺の果たした役割をきちんと評価していないなどの難がある。

また提示された資料からは尾張出身者の本格的な吉原進出は元禄後期から宝永期と読み取れるが、明暦三年以降という漠然とした年代しか示していないのは残念である。また揚屋経営から茶屋・妓楼経営という問題についても、揚屋の分析が不十分で、この問題が解決できれば、論旨はさらに鋭くなった筈である。

また尾張出身者の吉原進出の背景として伊勢湾海運を挙げるが、金融という視点に立つならば、知多半島の生産力についての考察、特に醸造業その他によって集積され、今日に至っている富についての考察が必要であろう。伊勢湾海運の影響については実証されておらず、不十分である。

第二章の「妓楼〈和泉屋平左衛門〉」は本論文の白眉ともいえるべきものである。吉原細見と浮世絵を使用することによって、極めて実証的に論証されている。

足立小右衛門新田の開発によって蓄積された豪農、日比谷氏の富が吉原に投資され、妓楼「和泉屋平左衛門」という企業が創始されたことが、明快に説かれている。その出発は太田善右衛門に対するM&Aとするが、日比谷が主張する合併なのか、それとも経営不振に陥った太田屋の単なる資産購入なのかは、太田屋の経営権の問題その他の分析が未解明のため、まだ疑問の余地がある。しかしその後の和泉屋平左衛門の経営戦略についての考察は十分な説得力を有している。

日比谷は妓楼経営を企業会計の立場から、貸借対照表によって説明しようとし、遊女を抱えることが奴隷会計と同じであると説くのは卓見であるが、示されたモデルは自己資本を過大に評価した可能性が高く、かつ諸経費を過小に見積もるなど問題が多い。これは妓楼経営の損益計算書を示すことができなかつたということに起因していて、今後の研究の課題を示すものとなった。『竹島記録』等のさらなる検討が必要であろう。さらに第一章で示された岩屋寺等からの金融の実態もこの発想を生かせば、さらなる展開が示せたはずである。これは後述する明治五年の娼妓解放令の評価の問題ともかかわってくる。

天保の改革前後の吉原の考察は妓楼と茶屋との関係を遊女絵によって説明していて、その結論は首肯できる内容となっている。ただ公許の遊廓である吉原に対する政治的な規制は非公認の遊廓である岡場所に対する規制よりも軽微であったと考えるべきで、この章は天保期の景気後退と物価騰貴の問題と関連付けて論じられるべきである。ただその時期の吉原の変質を、天保改革の影響による深川の遊女屋の吉原移転に求める見解は有力な仮説であろう。大黒屋文四郎による妓楼における客寄せなどのエピソードを上手に使っているが、従来の妓楼と深川から来た妓楼の対立、妓楼と茶屋の対立といった経済的利害の対立

軸が明確になっていないことが問題である。さらに「ふりの客」や「小釣」など、今後解明されなければならない問題点が多々ある。

鶴和泉屋清蔵や和泉屋まつといった妓楼との関連も明確にされていない部分がある。娼妓解放令と廃業、近代資本主義への転進について論じた個所は自己資本比率の高かったことが想定される和泉屋と他の妓楼との比較についての考察が必要であろう。娼妓解放令は企業会計からいえば、資産の急激な償却であり、これを乗り切るためには自己資本の厚みが必要であったと考えられるからである。自己資本の乏しい妓楼はこの償却に耐えられなかったと思われる、これらの妓楼は転身できずに実質的に廃業せざるを得なかった可能性が高い。これは娼妓解放令の影響に対して新たな影響を与えるものであったと思われる。これは第一章で論じられた尾張系の妓楼の消長にも関わる可能性が高い。これらの問題を明らかにするためには、第二章で示された財務諸表を使ったモデルの構築が有効であると思われる。特に産業資本への転化を推し進めた日本の紡績王と称えられる日比谷平左衛門については、伝記等も含めて、さらに説明が必要である。

和泉屋をとりまく文芸環境については従来の研究に欠落している部分であり、評価されるべき点である。特にのろま人形の家元としての和泉屋は今後の研究課題であろう。第六章「吉原男芸者と芸能」の中で取り上げられている山彦新次郎についてはこの中で取り上げられるべき部分を含んでいる。

第三章「遊女絵の開板年と吉原経営から見た開板動機に関する考察」は溪斎英泉画「契情道中双ろく見立吉原五十三対」全五十五枚の精密な調査により、開板時期、開板の動機について論じたものである。オランダのライデン市の民族学博物館に収蔵されているシーボルトコレクションに将来された39枚の作品を基に、多くの収蔵機関の作品から異板を抽出し、文政七年四月三日の火災で全焼して仮宅営業を行っていた吉原が、文政八年夏に吉原に戻ったことを宣伝するために一度に開板されたという結論を導き出しているが、妥当な見解といえる。

第四章では第三章で異板の考証過程で遊女の紋に注目し、同名の遊女を描いた浮世絵の識別に遊女の紋が有効であることを証明し、新しい浮世絵研究の技法を確立している。最初に遊女の紋を描き分けた例として、「和泉屋平左衛門仮宅之図」を紋と吉原細見によって分析することにより、和泉屋内の人間関係、特に「引き込み新造」についての考察を行っている。

次に海老屋鴨緑の紋に注目し、浮世絵に描かれた鴨緑の紋を分類して吉原細見と照合することにより、鴨緑を描いた浮世絵の制作年代を確定するという技法を確立した。浮世絵の制作年代の決定は、天保改革以降は改印によって確定することができるが、文化期から天保期の浮世絵の年代決定は画工の落款等によって確定されているのが現状で、高い精度で年代を確定することは困難である。従来も役者絵については役者の解析によって年代を確定することが可能であったが、この技法により遊女絵についても年代を高い精度で確定することが可能であることを証明した。

溪斎英泉「吉原八景」が「吉原美人」に再利用され、紋の変更が行われていることから、紋が属性情報を示すものであることを証明した。

さらに姿海老屋の「七里」「七人」を例に姿海老屋内の勢力関係を明らかにした。これは人情本等の注釈を行う上で、漠然と理解されていたことを具体的に証明した重要な指摘で

ある。今後の課題としては、文芸作品にこれらの現象がどのように描かれているかを調査し、肉付けを行うことが必要と思われる。

第五章では安政大地震とその後の仮宅をめぐる問題を取り上げている。『冥土細見』と浄閑寺過去帳、『吉原細見』の比較することにより、平野屋における人的被害を定量的に明らかにしている。また和泉屋をめぐる仮宅営業をめぐる諸問題について考察し、仮宅場所と期間決定の経緯、妓楼の既得権、「平和泉屋仮宅」図と國芳筆「里すゞめねぐらの仮宿」の比較考察を行っている。

また北斎の娘應為筆とされる「吉原格子先の図」は和泉屋平左衛門の店頭図であるが、妓楼にはない掛行燈が描かれていること、暖簾の位置、籬の形状が江戸期の吉原と異なることから、後世の作品として断定している。極めて論理的な結論であるが、北斎研究者の間では應為筆であることが定説化していて、絵は必ずしも正確に描かれる必要はないという美術史側からの指摘に対抗するためには、「吉原格子先の図」の光線処理の問題などを解決しなければならない。

第六章「吉原男芸者と芸能」は音楽家でもあり、幫間でもあった男芸者を論じたものである。特に河東節の山彦新次郎から見た歌舞伎、吉原俄、天下祭における相互の関わりを論じた所が重要であるが、残念なことに歌舞伎の曾我祭についての理解が表層にとどまっている。舞台上で演じられた曾我祭ではなく、実際に楽屋でおこなわれた曾我祭を論じれば、その祝祭性はさらに明確になった筈である。寛政三年の助六と吉原俄「禿万歳」、文化五年の吉原俄を描く「青楼仁和歌全盛遊 泰平住吉踊」、文化八年の「阪蓬萊曾我」と文化九年吉原俄、文政二年「助六所縁江戸櫻」と吉原の関係は浮世絵や演劇記録を基に吉原と歌舞伎の関係を論じたもので、説得力のあるものとなっている。さらに山彦新次郎父子の菅野序遊父子と一中節の関連を論じた部分も浮世絵を多用して論証を進めるという、従来の研究には見られない特色あるものとなっている。

第七章「酒井抱一と吉原の文化」は第六章の中で総合的に論じられるべきである。内容は概説が多く、新見に乏しいが、日比谷にとっては、次に論じられるであろう江戸文化全体と吉原との考察をする際の入り口として位置づけられるもので、必要不可欠なものであると理解される。

以上、本論文の優れた点、また解明が不十分である点を指摘してきたが、吉原細見と浮世絵、日比谷家の内部資料である過去帳を使用して吉原を論じようとした点は従来の研究に欠落していたものであり、高く評価することができる。また愛知県知多地域と吉原の関係、和泉屋平左衛門の消長、遊女の紋の問題、男芸者の問題等、従来ほとんど取り上げられなかった問題に光を当て、今後の吉原研究に本論文が大きな影響を与えることは疑いのないものである。よって博士論文として十分な水準に達しており、合格とするものである。

なお、日比谷孟俊氏は、学位授与の申請取扱内規第6条4の定めにより、文学研究科国文学専攻の専攻会議の承認を得て、申請者の経歴および業績の審査をもって学力の確認のための試験を免除したことを付記いたします。

以上